

頭脳国際循環時代に若手研究者が育つための 基本三要素：職務と時間と刺激

篠原 稔

国際的に魅力ある研究環境を

海外に出たきり日本に戻って来ない研究者に対し、頭脳流出と揶揄する人もいる。しかし、学術研究(者)の発展にとっては、研究者が国に縛られる意味が不確かであり、今や、研究者がより良い環境を求めて国を移動しながら成長する、頭脳循環が国際的に当たり前になっている。日本に戻って来ない研究者は、自らが成長できる研究場所として日本を選べない多くの外国人研究者と同じ状況なのではないだろうか。「日本において」若手研究者が育つためには日本出身者も含め、世界各国の優秀な頭脳が流入しに来たくなるような、魅力的な研究環境に変えていかなければならない。その結果が「日本人の」若手研究者が育ちやすい環境を導き出すであろう。

日本で若手研究者時代を過ごした日本出身者の私が、アメリカで再び“若手”研究者(テニユアトラック教員)をやり直してみると、職務、時間、そして刺激の基本三要素が若手研究者の成長に与える影響が大きいと感じる。文系入学(東京大学文科II類)、体育学科卒業(教育学部)を経て身体運動科学にのめり込んだ私は、日本では、修士取得後に大学体育助手(助教相当、東京大学)をしながら論文博士を取得する道を選んだ。研究以外の様々な仕事も多く、当時の職務は「組織全体に関わる教育、運営責任を果たした上で、“時間を見つ

けて”研究を行うこと」と感じとっていた。研究時間をなかなか見つけ出せない割に、どこでもそんな感じ、という研究への刺激の少なさもまた寂しい事実であった。論文博士は取得したが、研究者としての成長不足と大学の職務の非合理性に、やり所の無い焦燥感と不満が膨らむばかりであった。

そんな頃、在外研究でアメリカ(コロラド大学)で過ごしてみると、目の前にいる大学教員達は、皆、研究活動を職務の大部分としている。老若問わず。この環境を逃す手は無いと、その後5年間の研究員生活(ペンシルヴァニア州立大学、コロラド大学)でアメリカ式の研究・教育手法を身につけ、2年前からはテニユアトラック教員(ジョージア工科大学)として、身体運動を司る神経筋系の仕組みに関する研究・教育を行っている¹。

評価と一致した職務をサポート

アメリカの魅力的な点は、採用時に研究設備を与えてもらえること、職務の7-8割が独自研究であり、卒論/修論などの研究もどきにも振り回されず、上からも下からも影響を受けない自分自身の研究時間が“自動的に確保されている”ことであろう。ただし、アメリカでの研究は、大学とは独立採算で行うものであり、しかもお金がかかる。学内研究費は採用後3年目からはもらえないし、獲得してき

た研究費で給料を払える人数しか院生を採用できない(約250万円/年/人)。研究費獲得も、予備データを含めた論文数編相当の申請書を唸りながら書き、数回の審査とリバイズを繰り返す大掛かりなものだ。研究の時間が確保されていないと、職務を遂行することが不可能なのだ。

研究費の獲得が容易でない上に、研究費を獲得できなければ、職務遂行能力不足ということで、採用6年後のテニュア審査でクビになってしまう。これはその立場に立った者だけがわかる大きなプレッシャーだが、職務と評価が一致したこの制度は、若手研究者にとって、研究に集中する大きな刺激ともなっている。他人に文句や言い訳を言っている暇など無く、自らの力で結果を出す真剣勝負にならざるを得ない。成長の見込みのある研究者だけが採用され、成長しない研究者は生き残れない、皆がその真っ只中にいる、というのも良い刺激だ。

さらに、研究の広がりや研究者としての向上心や成長というような面においても、日常的な刺激が重要な役目を果たす。移民の国、アメリカの大学には世界各国から優秀な頭脳が集まっている。それだけで刺激的だが、そこに、毎週のように国内外から一流研究者が招待され、優秀な頭脳が集結してディスカッションが行われたり、個別にミーティングしたりする。そこでは「知」以外の要因(年齢、



PROFILE

篠原 稔
(しのはら みのる 1966年生)
ジョージア工科大学理学部応用
生理学・准教授、VAメディカ
ルセンター・研究員、エモリー
大学医学部・客員准教授、立命
館大学総合理工学研究機構・客
員研究員
専門：神経筋生理学、身体運動
科学

立場、性別)は絡んでこない。そういう知的好奇心を自由にぶつけ合う刺激を日常的に受けていると、研究の視野が広がり、優秀な研究者とも身近な関係になりやすい。もしかすると自分もその域に手が届くのではないか、というような錯覚さえ覚え、研究にも熱が入りやすくなる。

私は、将来、細分化された研究(者)を有機的につなぎ合わせて、身体運動の複雑な仕組みをより広い視野で解明する、総合ディレクター的な研究者を目指している。それを遠くに見据え、足場を固めながら視野を広げようとしている私にとって、現在の研究環境は私を大きく成長させてくれている。アメリカの独立研究偏重環境が最良とは思えないが、上記を参考に、職務と時間と刺激の基本三要素が合理的に結びついた環境が日本で実現されれば、「日本において」若手研究者が育ちやすくなるのではないだろうか。

ただし、頭脳国際循環の現代、本当に「日本人の」優秀な若手研究者の輩出を望むのであれば、それに加えて、研究界標準語(英語)での研究活動を標準にして頭脳流出を促し、

その人達が将来さらに優秀になって頭脳流入として帰って来たくなるような、そんな頭脳循環促進型研究環境を業界標準とすることが重要なのではないだろうか。それが、ごく一部の大学 / 研究所のみではなく、広く行き渡り、どこでも当たり前になることが。

参考文献

1. 篠原稔．体育教官のアメリカ標準研究者入門トレーニング．日本生理学雑誌 68(12): 446-447 2006.